

## OR を築いた人々(3)

## 小野部屋の師匠 “小野勝次先生”

本告 光男

小野勝次先生については学会誌 2001 年 11 月号の冒頭、第 2 頁に、私の追悼文「小野勝次先生を悼む」と、先生の略歴が掲載されていますので、是非御一読下さい。

先生の御専門は数学の基礎論、論理学で、OR 学会が発足したころは、機関誌が送られてくるので、誘われていることを認識はしておられたようですが、お断りになっていたと伺っています。中部支部は 1961 年（昭和 36 年）10 月に発足しましたが、その際、文部省経由で名古屋工業大学の清水勤二学長に支部設立の働きかけがありました。清水先生は、支部の中身を作る牽引役として、小野先生に参画するように口説かれました。

小野先生は「清水さんとは長い付き合いだし、義理もあるし、まあ月に 1 回ぐらい集まって、話を聞くくらいなら何とかやれるだろう」といわれて、また、支部長はいやだ、といわれて、支部長 清水勤二（名古屋工業大学学長）、副支部長 小野勝次（名古屋大学理学部 数学科 教授）ということで引き受けてもらいました。それから 3 年後、昭和 39 年に、清水先生が亡くなられて、その後、支部長をお願いしました。それから、会長に就任（昭和 47 年度）されるまでの 7 年間（昭和 39～46 年度）支部長を引き受けて下さいました。その 10 年間に支部の月例研究会を熱心に指導されました。

この研究会は、みんな裸で話し合うことをモットーにして、企業秘密などについての仁義は守ることにしていました。研究は、主として企業から今抱えている問題について説明して、皆で質問し意見を言うやりかたでした。数学のお弟子さんたちがセミナーの集まりのことを小野部屋と呼んでいましたので、私たちがそう呼びました。

研究会の討論の途中で、“昔からのことわざにも、科学的にはウソを言っているのがあるね！ 気をつけなと”という話から、……例えば、“僕が小学校の 1 年生か 2 年生のころだったと思うけれども、達磨の

絵に「七転び八起き」と書いてあって、先生がそれを見ながら、くどくどと説明するもんだから、僕は「達磨は平生寝ているんだ！」とやってやった。そうしたらひどくしかられたね！”とか、またこんな話もされました。“僕が小学校の 5 年生か 6 年生のころ、歴史の時

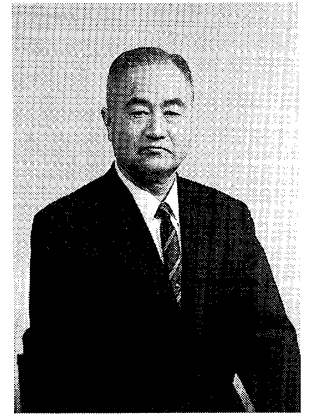
間だったと思うね、日露戦争の日本海海戦の話だった。先生が東郷元帥は「100 発 100 中の砲一門は、よく 100 発 1 中の砲 100 門に対する」といわれた……と言うもんだから、僕はね「ウソ！、それじゃ勝負にならないよ、1 回撃ちあったら、お終いじゃないか？」と言ったの……そしたら「軍神の言われたことに、何という不謹慎な！」って、散々叱られたことがあったよ！」等。先生は少年時代、既にランチェスターと同じような観察をしておられたようです。

研究会では何時も、このような小野先生一流のチャチャを入れながらの独特の聞き役ぶりでした。先生は時には私たちの問題について、その“型”を鏡に映し出す役をして下さいました。また、時には発表者の問題意識を、ひっくり返してしまうこともありました。

支部発足当時の研究会は、“OR をやっている同志の語らい”というような雰囲気がありました。

さて、小野語録といいましょうか、先生がよく言われた言葉を紹介しますと

- ① OR のマニアになってはいけない。
- ② 科学は万能ではない。OR もしかり、問題によっては経験による感の方が余程良い結果を出す。
- ③ 話が理解されなかったときは、聞き手の知識不足と思いがちである。しかし、本当の原因は話し手の理解不足である。話し手が本質を良く理解していれば比喻や例示などによって知識の無



い聞き手に対しても理解できるように話すことができるはずである。

- ④「手法の研究は重要な仕事である」これを否定はしない。しかし、ORの手法を知っていれば、何でも解決できると思ったら大間違いだ。
- ⑤ 問題の研究と手法の研究は車の両輪でなければならない。
- ⑥ 明日の問題を1カ月かかって精密に計算しても意味はない。ラフでも好いから与えられた時間で判断をだすこと。

等です。また、コンピュータについても御造詣深く、45歳のころ「山下英男、小野勝次：継電器式電気統計計算機の研究」で日本学士院賞（昭和29年5月）を受賞しておられます。フォン・ノイマンと同じところに、同じような研究をやっておられたと伺っています。シミュレーションの計算など、大規模計算結果を誇らしげに報告しますと、“その結果が正しいことをどうやって確かめるの？”等、われわれはよくからかわれました。

小野先生のコンピュータについての語録は

- ① コンピュータのこけおどしに乗るな！ コンピュータで計算したから信用できる、と思わせる……ウソ！
- ② ハードウェアを信用するな！ 電子回路だって絶対なんてことはありえない
- ③ ソロバンを2人の丁稚にやらせる……2重回路の思想、人命にかかるような計算は、2人の丁稚にやらせる！

等でした。私は小野先生のこれらの警告を思い出して、助けられた経験があります。

先生は数学の演習問題を解くようなORにはあまり関心をしめされませんでした。一方、手法はまずくとも実務への適用には興味をもって聞いておられました。そして必ずコメントされました。

また、“型”へのこだわりがありました。小野先生は陸上競技に科学を取り入れた方として、陸上競技の世界からも感謝されていますし、そういう著書もあります。織田幹雄さん、大島謙吉さんとも親交がありましたし、戦前の大相撲で上手投げの名人と言われた大関清水川関とも親交がありました。学生時代は競歩の

選手としてオリンピックの候補にあがるほど、ご自身が本格的なスポーツマンでした。先生は針金で、競技のある決定的瞬間の骨組みを作って、それに粘土で肉付けをした人形をよく作っておられました。そして関節の角度を変えたり、力学の計算をされたり、ハードル、走り高跳び、競歩、などすべて合理的な型があるものだ、とおっしゃいました。それと同じように、問題のモデルの“型”にこだわりました。それと遊び心もありました。例えば、PERT/CPMによる火力発電所の点検工事の管理について、小生が月例講演会で報告した際、小野先生が聞いておられ、「プラスチックで矢印やダミーのはめこみ式の玩具を作って（今のLEGOのような道具）、3次元のネットワークを組み立てて、天井からつるしておいたらどうだ。済んだやつは外していく……“商品化すれば売れるぞ！”」と言って笑っておられました。

月例研究会の主催で、年2回ぐらいハイキングに行きました。それには奥さんや娘さんも参加されました。先生の足には誰もついていけませんでした。

お宅に伺いますと、時には、「これから散歩に出るから、歩きながら聞こう！ 僕はね、歩きながら考えると良い発想が浮かぶんだ！」とあって、歩かされました。先生は、好い思いつきがあると歩幅が段々広くなりました。ですから、私たちは小走りになって、付き合っているうちに息が上がりました。

月例の研究会はこのような内容で、相撲とりのような堂々とした体格の小野先生が指導されましたので、いつの間にか小野部屋の呼び方が定着しました。

先生は相撲がお好きで、本場所が始まると先生の方から「おい、相撲の話に来ないか？」と誘われました。そうすると一升ぶら下げて3~4人誘い合ってよく伺いました。こういうときに先程お話しした陸上競技の人形を見せていただきました。奥様も一緒になって、談笑されましたが、奥様にはご迷惑だったかもしれません。

私たちは小野勝次先生からこのように眼に見えない大切なものをたくさんいただきました。

昔から温故知新と言われていきますように、これからの学会の運営に、また皆さんのお仕事に、参考にしていただければ幸いです。